繪本甲越軍記三編

一

2258
25

507

池清

遠13
2258
25

三編巻之一

# 甲越軍記叙

洛の遠水春曉先生曾て甲越軍記を編ミ及び未上梓して
を重作し。既ニ編ミ及び未上梓して
起稿ら於是その書稿を訂一山
軍板ゆ。蓋先生の軍記ハ公を
用ひ詳精貞の事實を記し。且
侍士得失の隠よるを毎ゝ授児童

三編巻之一 叙 南里亭某実叙

能くこれを古に知られ、而して僧侶ありと。而
筆見をしるし。補足せんとする。書
肆の需に応じ、幸に閲して訳て
微意を尚添まみらん。

文政八乙酉

浪華長春里斎南市隠

中秋望夜

南里亭主樂述

# 甲斐軍記三編序

善よし野乃山の岩根をはしりあるいは清流のそそ
水ながれ〜の書あらたし絶へ数ふ絶の書十万里踏こ
まきをかはらみ甲斐の国紙方流り半けと。武田乃
ちふみふとさ紙の書の根乃長尾ながる
ぶらとい〜みり乃〜〜ふ桃〜あ〜をむし。たけくさ〜
しを思いま〜への軍ながはしへみもなりゆ。拝ろう
絶つ〜乃大和の由をかけまることかし古紀
大きながら大沸むくりちぐめく。青人まながら誘も
あっく生く武くを〜しきて。神京乃ろろちろ

くるふかゝ移時のうゐせみ世の有さまあはれ事ふ
世の姿をよんでいとおもしろく歩れて戸まどろ拭ふり
らして。君おやゆはゝ老よるかりぶもみぐしし
事うしせのうゝをとゝろ。安國とたゝひて。
すめる天がしをみ大事あをもちげの女のまふとう
けたゝへいとくさふれよをそ。大人乃世のぬゝをたふ
ゝ移へるなりとゝ。

湯浅經邦

甲越 24

# 續本甲越軍記三編目録

巻之一

發端

武田長尾海野平對陣之諸事

海野平合戰之諸事

武田晴信所〻手遣之諸事

武田長尾小縣對陣之諸事

武田晴信第騎塩尾峠出陣之諸事

巻之二

塩尾峠合戰之諸事

深澤平六左衛門信宏戰之諸事

帝国文庫
湯浅經邦序

小山田平治左衛門尉緒之事
長尾景虎越中發向之事
伊奈木曾松本手遣之事
習井坂合戰之事
小幡孫治郎欲將元山筑前守と討諸
卷之三
石井孫三郎南部小創諸
長尾景虎小縣出陣之事
再海野平對陣之事
鬼小島弥太郎勇戰之事
三尾寺合戰之事



武田埋伏安中勢と討諸事
卷之四
信州佐久郡合戰之事
甲越兩軍各勢
大益小幡忠監之諸并石坂平家と諸諸
法福寺合戰之諸
卷之五
北條氏康頼今川上杉三軍事
長尾謙信榊退口之事
板垣小山田忠軍と責給之事
板垣信里武田家と恨諸并曲淵庄左衛門が諸
卷之六

曲淵雑言之話
落合彦助話
落合彦助仙海法印が命ヒ乞話
長坂源五郎落合を瞞話
落合彦助金九平三郎と対話
武田大膳大夫晴信雑髪之話
板垣信里誠妨郡代を被放話

巻之七

時田合戦之話
長尾越前守政景退口之話
小山田栗原戦創并憂死之話



板垣信里勘氣と蒙る話并岩間大蔵左エ門が話
上杉憲政管領職を継信と譲話
新屋原合戦并月村倉竹把口退話

巻之八

武田太郎義信首服之話
結梗原合戦之話
小笠原長時深志開城之話
原美濃守勘氣と蒙る話
武田信玄加島出陣并原入道勇働之話
加嶋合戦之話
河中嶋対陣之話

信玄木曾乱入并瀬場討死之諸

巻之九

原隼人佐晴之地理之諸

佐奈多吉兵衛初陣并天野鬼十郎討死之諸

木曾左馬頭武田小隊参之諸

河中嶋出陣之諸

河中嶋接戦之諸

巻之十

甑尻合戦之諸

武田上杉和義成ず弓諸

山本道鬼諫言之諸



上杉謙信放火之諸

上杉謙信上洛之諸

上杉勢相州乱入北条援と武田小乞小諸

巻之十一

鰐が山嶽城之諸

上杉謙信武田信玄の約を寝ぜるの憤る諸

武田上杉り中嶋出陣之諸

武田信玄手配之諸

上杉謙信手配之諸

謙信敵之謀略

信玄敵之陣備

見ヒ陣諸

巻之十二

川中島大合戰之諸
諸角豊後守血戰討死之諸
穴山伊豆守備と本庄山吉が備合戰之諸
武田義信原隼人が備と柴田上田が備合戰之諸
武田が後備敗軍之諸
山本勘助入道討死之諸
初鹿源五郎討死之諸
鎌倍信玄が旗本合戰之諸
上杉謙信單騎武田信玄に太刀打之諸

惣目録終

甲越交兵爭論功
旌旗靡亂向西東
雌雄未決竜兼虎
萬里長風吹綠叢

柳種春書

武田大膳太夫晴信入道信玄

甲陽軍鑑輝日東
太公秘書何足誦
神天奇計下呉宮
捲地神兵統摩水
五戰功
烏嶽翻旗

柳種春併書

# 繪本甲越軍記三編巻之壹

## 目録


發端

武田家繁榮之圖

武田長尾海野平對陣之事

海野平合戰之事

同圖

武田晴信所々手遣之事

真利藤蔵勇戰之圖

509

武田長尾小縣對陣之事
甲越勝負戰之圖
武田晴信草野塩尾峠出陣之事

# 繪本甲越軍記三編卷之壹

發端

孫子曰兵貴勝不貴久故知兵之將民之司命國家安危之主也爰ニ本朝足利將軍義政公の治世ニ當リ応仁の兵革起リ以降足利家の末ニ至リ大永天文の頃諸國麻ニ如く乱れ蜂ニ如く起リ干戈止時なく雄旗天ニ翻リ英雄猛將獨立し各國境を侵し豪傑威名を耀さんと競ふ中ニも經天緯地の才と隱武威を群將ニ秀し謀略古今ニ独歩し正奇ニ妙策を究め英名を裏ませしを甲斐國武田大膳太夫兼信濃守源朝臣晴信入道信玄弧後國上杉彈正ノ弼藤原朝臣景虎入道謙信の両雄なり武田晴信ハ幼名勝千代後大郎と号し首

服して大膳大夫兼信濃守小任ぜ父左京大夫信虎大膳不敬よ
く暴悪都過とろ以て老臣等信虎を瞞し駿州に廢と晴信
時小十八歳天文七年武田の家と續ぐ天性英雄優秀ちろ上家臣
穴山・甘利小幡・小山田・板垣・飯富・原・内藤・馬場を始め累代武勇士
羽翼と輔け諸國の豪才猛士晴信と慕ひ聚る者夥しく中
小も山本勘助晴幸・先崎多弾正忠行隆と得て軍謀を益
研究し戰へば勝対べ敗く威風朝日に登る如く天文十二年雄
髮しく信玄と号し德栄軒道号ち機山大僧正に任ず法性
院と號し武田大膳大夫兼信濃守晴信入道法性院大僧正
機山信玄と号し

武田信虎の暴戻老臣等信虎を瞞しく駿州今川家



小遂に始末大永元年勝千代誕生ち初陣海野口乃
夜撃其餘所し合戦の奇策天文十五年村上義清と
戸石の合戦上杉憲政と笛吹峠の合戦共に山本勘助
佐京弾正武田家小仕ち事蹟ち甲斐軍記初
編小委しく記と

上杉景虎本姓長尾幼名虎千代或云猪鹿と喜平治後平三と
号し又信濃守為景越中に討死の後兄弾正左衛門晴景職
弱乱行なる越國の危と察し晴景と責対天文十六年長尾の
家と嗣ぐ年時十八歳生質智勇抜群ち上家に古士宇佐美
加地・柿原・安田・高梨・直江と始め勇猛の士是と輔佐し英名を四
隣小震ひ天文二十年弾正少弼に任じ管領職共に上杉の号ち

511

武田家繁栄の図

屋形民部少輔憲政が譲りを受同二十一年剃髪して入道謙信と号し永禄四年上洛して将軍足利義輝公に謁見し輝の字を賜ひ網代の輿を免許管領上杉弾正少弼輝虎入道謙信と号す

長尾為景武威を耀して隣国を掠め越中にて討死の始末享禄三年虎千代誕生より兄弾正左衛門晴景を討その餘所々の合戦の事蹟は甲越軍記二編に委しく記す

于時天文十六年武田晴信二十七歳長尾景虎十八歳両将初て干戈を交へてより十五年の接戦中にも川中嶋の合戦は今に至りて人口に膾炙して美談とする所なり抑武田長尾が矛楯の濫觴を尋るに信濃国葛尾の城主村上左衛門尉義清武田と屢戦ひを挑み国境を争ふ天文十五年信州戸石に拠りて彼と戦ふ同年真田弾正忠幸隆が謀略に陥り義清が一騎当千と頼みたる薬師寺右近進清野六郎次郎を始め究竟の勇士五百人余も討れ翌十六年志賀の城を陥され城主笠原新三郎附上総討死の由を聞て憤りに堪へず稀信州上田原に出張し晴信と有無の一戦を遂自ら武田が旗本へ切入て大将晴信と太刀打あり又武田が士窪田助之丞が馬を既に危うかりしを味方の勢馳来り争ひしで引退くと雖も本城の帰路を遮られ葛尾に帰る事叶はざれば猿ヶ馬場の峠より下より幸に出山路より甲て越後国に到り長尾平三景虎に対面し上田原合戦の次第を語り本城を奪はれし始末辯

遂と矣くしい以間砲辱と云れ画と涙ぎ為ひ降と云ひあるあられ
紋將の心裡とあふ一段本國葛尾城陥あるを孫子
生前の大恩行事を此上ゆいだと涙と落しく頼れ
虎時ゆ十八歳頃ゆ情と
めふ天文十一年紋中して討死しゆ基孝養の為近く勢
と發しく紋中と切從へ加賀能登紋峯と始め坂東と幕下ゆ
屬し　幸都ゆ上洛して足利將軍ゆ謁し天下の權と掌ゆ握
武名と四海ゆ輝さんと存る不圖ゆ若年の果と所存
条武の義理免ぶく二箇ゆ武田晴信と智勇乃勝
あるく義國ゆ名と称ゆ聞畏し義と点く黙止せうと人口
あるべ君への奉公父の孝養と圖く晴信と一戰し年



城ゆ籠城せゆさんと領堂ゆ入りて合戰の次第と委しく聞晴
信ゆ人数の扱い上るして陣法と為く敵ゆ勝と覚べさり紋
減ゆ軍と信州ゆ出し敵の奇郷と探らんと六千餘人と引率し
同十月九日紋後の春日山と首達あり久ゆ
武田長尾海野平對陣之話
事ゆ臨く苟も免ゆ支あれと義將しゆ長尾平三景虎
村上左近門義清ゆ頼れ天文十四年十月軍を信濃國ゆ押出し
敵方の領分と悉く故し民郷と侵さ勢ひ強大ゆ信州ゆ
武田ゆ家臣ゆ屬ゆ諸將ゆ用州ゆ注進ゆ
武田大膳太夫晴信ゆ時ゆ二十七歳ゆ
合戰の後村上左衛門身の行ゆ紋後ゆ遁ふ

扨ても景虎と頼る先の孤辱と雪ん待構あるべしとて同十二日甲府を發馬あつて小室に著十九日海野平に出て戰ひと支へんと備へを押出し扨原美濃守虎胤小幡織部正虎盛山本勘助晴幸三人と呼ばれ中にも長尾景虎父の敵城中と捨て我國の軍と出る事に村上に頼れ義を守る戰ひあれば勇を励ます名を揚げ一戰ぞと甚と景虎若大將と中にも項羽も敵く勇ましと南べ必定十死一生に働くべし我兄の毛程も後れと取たらんや今迫村上と度く仕給へ武威更餘と捐る景虎あれば當家の恥辱なり大事の合戰あり間汝等能く自後して見積るべしとかうれば皆畏て弛出し敵陣に近くとくんで各十重二十重に取巻て合戰と持ぬ暮て



又敵人數に比べ山本勘助に敵の備速あり中に濁りて物ふて合戰と持ば始く當方の取合あれば彼の作法甚嚴重あり中にあれば軍に備と定むべしと高城あり山本勘助進て出原濃州が敵の備合戰と持彼と寄て別手と寄て組合せ一手に射かけ四方より矢を彼こそ亡矢と堅く留られ先也打味方に彼と方向にもされ一手二手にて命られ跡と偃月に左右の方と鋒矢に彼へ鳥行ふられ懸て待給ふべきに景虎若氣の荒大將あるとも味方に一万五千の人數もくつふもして午の刻迄會戰に給て味方の爲吉利て候也若に剛強の大將味方勝べきと存也とて敗せざる術を以て敵に次第小弱の味方の勝利と

方向
意義、文法?

ある物ゝてはと中るれば汝が中を一こ理は賞あるべきらば備を配ふべゝと陣と鶴翼ゆ定めらるゝ先手の右の方ゝ小山田備中守ゝ信州の先方ゝ相木市左衛尉望月甚八芦田下野守支野平尾岩尾耳取依路平原左の方ゝ小山田左兵衛尉ゝ信州の先ゝ長窪左衛門尉小曽甚八塩尻五郎左衛門和田福澤内村中の先手ゝ栗原左兵衛尉昌清先方ゝ須田浦路守室賀綿内井上旗本の前備へゝ佐久弾正忠幸隆先方ゝ丸子屋澤旗本の右の方ゝ町と隔ゝ飯富兵部少輔虎昌ゝ鋒矢ゝ備ふ後備へゝ馬場民部少輔景政内藤修理亮昌豊日向大和守日時勝沼入道宗山伊豆守信良武田典厩信繁ゝ本陣のうしろゝ弓手の方へ鳴行ゝ備ふ跡備ゝ原加賀守昌俊九十騎ゝ

引下つゝ陣ゝとゞ取ゝ引ゝ殿後方ゝ長尾景虎ゝ先陣ゝ義後河守定行と軍紀あゝて備へと龍の九備ゝ先陣ゝ長尾藤原守政景景虎の吉江織部同備中守佐渡守中條梅坂齋三の備へゝ柿崎和泉守景家直江山城守兼續大関所波守親益柴田道壽半川播磨守安田上総助三陣大將景虎ゝ旗本ゝ粕近江守景時上田修理進景國と於本の左右ゝ備へ是ゝ備ふ耳粕後守鉄上野助和田喜兵衛四陣村上左兵衛義清ゝ信州勢是ゝ備ふ高梨播磨守宗景色部修理亮長實島津左京進隆久井上兵庫助清政五陣右志賀守秀景ゝ旗本より五六町引ゝ備と駐奉行ゝ備ふ本城紙屋字繁長同清七郎是と主ゝ其外宇佐美駿河守定

紀山本寺宮千代丸齋藤下野守朝綱加地安藝守同右京亮北条丹後守竹俣三河守と共に就後の
部一子・山村若狭守同右京亮
勇将等威風凛々として備へ立つ景虎諸軍に令して云く一年限
の合戦に我家の法あり進むとも退くとも他の諸将等ハ力と合ハ
べ互に二陣の拵等の六将に先備への戦将が軍と共に後
一同に進み出で乱戦とかせ敵に虚なく晴信が旗本に
駆合急に攻討て有無の一戦と遂ん旗本の羽翼に備へ立其物
上田に我軍進み出るも少しも物と勃る事なく使へと
敵の使
みあるを待て速に是と討べ竹俣色部山村に摸合
敵に襲ひ来ん時奇道より進んで其敵と討しかせ弦馬の奉
行に遥に陣氣と揚よ万が一軍危く先に敗れ改景討死

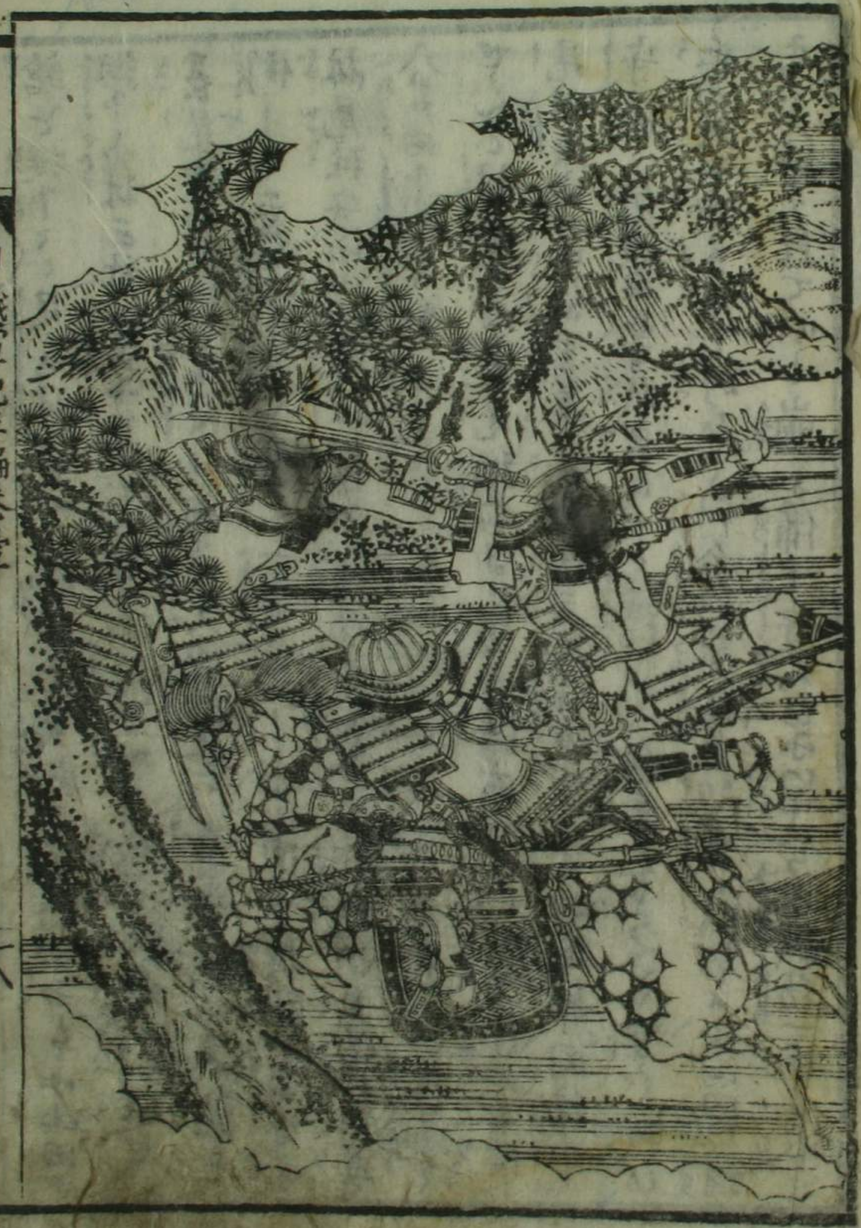
旌旗

とふるべ掃部和泉守是に代て掃部又討死とるべ柴田道
齋是に代て勇を勧めべしと厳重に下知と諸朝と
と待あるべ

## 海野平合戦の事

天文十六年十月九日午の刻甲越両陣旌旗と風に靡き
鎗刀に光雲と輝き紀隊伍と厳密に成て武田が先陣小山田
備中守長尾が先鋒長尾越後守が両陣今日初の出合られば
郡手出の牽小雪に追義と金鉄に比し勇と逞し金鼓と
聞と作て跡崎と揉へて押出し其間已に近付と
兵卒間先と揉へ一番に打放つ矢に百千の雷共一番に落ぬ
石礫雲に渦巻て渦巻て中に手強の剛兵

817





海野平合戰ノ圖

鎧と提下てく足音地と響て突掛し武田方より小山田が
組下小林三弥一番に乗て入り向ふ敵と叩き伏首を掻て引退
長尾方より紙糸守が組下宍田權左衛門真先に踊り入敵を突
倒し首とる是と双方の一番首とし小山田勢奥脇加賀守小
林尾弦守小山田彈正加藤丹後守先方より相木市兵衛望月甚
八井田下野太野平尾岩尾耳取依路平原先とあらそひ死を契く
せんと討出る長尾紙糸守が勢古澤市左衛門右室潜岐守遠
見丹後守高橋雲平佐倉佐司馬先方小古沢織部同伯中
守佐渡守等我劣らじと踏込く穂先とりくく戰ひ
血の波と跳る手と砕ひく討合形勢猶劣る甲戰ひ小山田勢討
ちつ捕られて喚と山崩ふ備中守大ひふ甲紙初てのを合せ



あらんを後れを取く後代迄名と汚とる無二を三を踏込く切死や
者ども多迫くと知られば雄の剛兵等是を励まされ死人と踏
越く殺声と揚死物と忘て戰へば長尾勢も見る却て崩され二町
ばかり纔に引長尾が二の手小和泉守安田上総助甲州勢の左の先小山田左兵衛尉の備を討く
鋒先尖く白刃の光うち電光の閃めく烈しき事獅子
の怒るが異に東西に雄叫べば矢庭に討倒る者地に小山
田左兵衛尉諸勢と励まし手先と廻り突崩さんと槍と打く
等死と顧ず組でも落組合せく首とる火水とあらて戰ふ
双方の手負討死数と思へば中にも武田方より塩屋嘉右

が見塩尻豊後といへる大勇の強兵直に山城守が勢の中く
一文字に切て入るる所に幸ひに討廻る直江が軍兵繰とまどと
塩尻と追取巻四面より討ふまぶ塩尻是と車とも せば大ちか
ふり廻り近寄武者四五人と斬倒し猶も進んで戦ふ所に折
鬼小嶋弥太郎八日の丸指物の使番ふく直江が徒へる赤かつ
母体とよろとより鎗引まぐれに島弥太郎と名乗く塩尻と突く
うふ共後大よりみび呂討ふと討ふみると穂先うて丁どうけ面
鋒先を少花と咲せ飛ちがふく打合が壮士の弥太郎が勢い迫ぐ
ば く滄と塩尻共後受拵ど眉間とぐさと突接れいんぞ
帯もためらふべき真逆孫よるとより落ると弥太郎が従者ふ
首とらせ敵中に馳て入直江が属下大井大九郎も先より



敵の中に入難力と馳めり武田勢と麻と羅が如く羅時るる
小山田左兵衛尉が戦士合り添ふた工門鎗と上く突るるを大
九郎二ふ二ふ戦ひ一声呼ふとこ入ぐ添五左衛門鎗とくひ上
られ乗るを所大九郎付へく斬倒し首と掻んとする所に小山
田小七郎馳寄り大九郎が甲の透と突通しく首に取其外西
家の勇将猛将五名と猶らく命と殺んと必死とるつく戦へば
分捕高名挙く長尾方の直江拵峠が軍勢を出高
ふるまらよく責討事急なれば武田方の小山田長窪小勇塩尻
等が頼く切ら勇士麻と乱とが如く討死しくれば甲州勢
僻易し敗れ五く二所ぐうの組と引中社先ふ和へる須田信濃
守室賀綿内井上が勢是とこく責敵と赤馬印と先ふ三勝

彎くる長尾勢の正面へ鉄炮と呼とおろけ噪ぐさけんぐ突き入
直江・柿崎・斎田・安田・寺嶋近江守和田喜兵衛味方と敵ひ須田室
賀の備へを突くかとゞ武田方の栗原左衛尉勝と小幡
と撲ひ引合せ鎗と刺鎗と割う戦ひ勝物いの果ぶ
る武田大膳太夫晴信長尾平三景虎の両大将ゝ本陣ゆ
床机を腰打ち掛け馬と側ゆ曳せ楽幣と握う合戦の様と目も放ぶ
ぬ軍使の往返ゝ絡繹して擬の歯と挽ぶめ一斯ゆ所く山
本勘助晴幸大将晴信の御前ゆ参う敵奥鱗を備へ無二の
一戦とうけんとゝ云へども味方の陣法堅固なれば破らんとゝ
虚ゆ付け故景虎必定戦ひと廻し引ゝ取べき体と為味方の後と討
んとゝ虚を突ぶ下さ方と微塵ゆ挫んぐる猛勢と覚へ御強へ



早其色何りこれてひあう長退仕う敵の猛勢を防ぐる搦
御下知あう後備ゝ中ゆれば晴信打勝頭を引退ひ
ゝて蛭の指物の十二人と先備へ小山田・栗原ぶ備へを馳遣
らゆ本陣を参う合戦将と始め使番の輩も斯取合一戦ひ
を就後勢いで勢と揚べきゆ不審ぶ使番ゝ戦場を馳
まゆ時合戦を美盛うて剛将強卒入乱き鋒先ゝ火と
出一足も引と踏迫ゝ戦ふ長尾景虎ゝ旗本と為ゝ
晴信ぶ旗本ゆ打合ゝ勝敗と一時ゆ変せんと猛られ武州方
ゝ飯富兵部少輔虎昌・景虎ぶ撲と奮ゝ馬上歩者一千又百人
倒ひ赤備うて馬武具旗指物と大将晴信の旗本の右
と厳重を立ゝ景虎も左右ゆ軍

能

敵

蝶

物

俄に揚貝を吹せ景虎馬廻り僅四五人に宇佐美駿河守定
刻と引具て先備に乗出乗掛と取て引揚られば先
も対大将長尾政景守正景大に怒り勝軍に成んで俄に引とり
給ふ所を武田勢と粉の如く崩れ散ぬ
んと雖ども宇佐美駿河守大に制し君の武勇とられて叶ふ
と返り駆入車最易しと雖も後陣の敵各備へを守りて堅固
なれば今日の合戦黄昏小及べどんべ勝負と成ても事不能
と今北雲西と称し扇を揚られば早く勢と揚て陣営と結ひ引へ
と蜜に謀略と告られば長尾政景守漸に怒気と解軽くして勢を
引揚殿後と勢ひて追ひ来る敵除と退ひられば武田勢大に勇み引
駆と
咬頭んと競ふ所に蛭の指物しに使番十二人馬を乗切て弛来り大

敵

521

将の御下知を敵引とも改て追留と称て追べし追べし軍令小背
く者に厳科に処すべき条制法より内場にて追留りれもと大音に
下知と作ふ山本勘助も又先勢小弛来り制しられば小山田栗原の
諸勢合と乗り混ると軍と引上る敵方の物離れに見事小なん
とうりる今日午の刻より未の刻迄の合戦に武田方に討死百五拾一人
長尾方に討死二百六十三人なり翌日晴信加藤駿河守昌頼山本勘
晴幸原美濃守虎胤小幡織部正虎盛の四人と呼れ景虎が武
勇軍術の量と尋ね給へば山本勘助進て出景虎が昨日の軍に人
に若大将なれども勇兵備に近代の名将と成へ今度の
挙動六千の人数と九備に作り無益に小押かけて合戦を初め先
備の戦ひと見て我旗本と成ん此方に旗本小切入点小

旗本の勝負と心がけ戦へば四方の備厳重にて其内当時君臣
軍卿小敵侮りて荒働いたすほど我方に怪れよもあるべきと存じ速
小人数と揚られし形勢中々大方ならぬ智謀の器にて勇猛絶倫
選び抜く其身に落姓健にして差撰くふる軍と廻さぬ事質とうべく
候必定已後も君小御腹とさせいやつふ仕うけ此方の備あり違よ
車にうべ其勢小多ふにて戦ひと紀さんと謀りべし此後景虎いの
やつふ仕懸ひとも御腹立あるべ備と堅固にべ景虎当家と戦
うん小勝負に負ても君より若年なれば不辱なれば強小力戦して
旗本と旗本と打合せ有之の勝負と変せんと覚悟せ候べし四方
ようとも唯陣法と堅固にして長尾が武略に切崩されぬやつふ大事小
無と扱ひ孫ひ姫終の勝利と肝要に候と申されば原小惜かれ

各山本が中上ふ不金言にて弓矢の智識箇様の事うてはと
感じられば大将晴信宗小として助助が言の如く若年
の景虎に勝さうにも誉あらば負ちんも不辱なり渠が軍立て
賢ひ来頼母布男なり我相手小成る鋒先と拿へ者を景虎
なりとなられば各名将の軍慮とぞ感じられ

武田晴信所く手遣さる事

越後の大将長尾景虎に其夜陣営小出あり諸将と集め
軍評議あるふ長尾越前守改景姉崎和泉守景家進る此今日
武田家の手並も大方ふ存知候いぬ今暫し時と待て給ず武田
勢と一戦小及るべきと早く勢と揚ふて猛念なり明日の一戦中
某等粉骨と尽くし一揉に討敗らん事 何の類ひ候べきと変もな

げふゆひられば宇佐美駿河守定行進み出両将の仰せ
尤も其儀晴信が備えとゝ云ふ中く智謀勝れたる大将と社云へ
ひへ当家の勇猛実ゝ〳〵當ふ不必級る事と知く勝ん事と
ひぶ専ら級れざる様陣と堅固ゝ備へくひへ必彼方より戦んとぬ
候つゝ両将の勇猛と云ひ〳〵一旦勝利と得給ふ共彼の処渠が堅陣
と申して全くの勝利と得ん事ち難く乗ふ軍と出さん
よう唯我共も對陣あり〳〵彼が守ふ不と考ひ急ふ処と考へ急ふ
攻討戦ゆて全勝と得給んとて肝要ふとやられば景虎も宇佐
美が異見尤可ふうとて又日が南海野平ふ陣と張ゝ甲州勢の仲
あゝん事と待ども宇佐美が言ふ違ひ甲州勢戦ひと始さるべ
軍ひしはち付ふう一先軍と見んべゝと海野平と陣[掛]就後

の國へ飯陣有級武田晴信ゝ小室ゝ陣と云ふ所ゝ取甲州
方より先達ゝ信濃國伊奈の保科弾正忠が勢の押へとして軍と
出せり秋山伯耆守晴近伊奈勢と戦ひ〳〵馬武者二十七騎雑兵
二十五人都て四十二級の首と得三千貫の地と切取晴信が小
室の陣ふ注進と同十八日木曽左馬頭義昌小笠原大膳大夫
長時の押へとして飯綱塩尻ふ備へる其利蒜藏多田沒路
守ち小笠原が勢ひ備へる夜討と仕て責討ぐる小笠原方も
繁く防ぐ程ふ武田勢進ゝ兼る所ふ其利蒜藏今年十四歳
ロ二騎馬と出先ゝ進み簡注の敵ゝ進ゝ〳〵ゝ早怪ふ鑓
けやゝと大音ふ呼ゝ直鎗と横ゝ入ふ敵三人突倒いよ
進んで戦へば武田勢是ふ励まされて討てかゝる小笠原方風間太郎

524

左衛門衆より抽ぐ藤蔵と目指突かゝり組敷と尽くして戦ひしを再
利遠さじ風間が鎗と叩き落し大喝して風間が胴抜くと共に
突き落して首と捕る笠原方是より辟易して乱れたる柵の中より逃
入と其利多田が勢勇ましく逃る敵を追討て首九十三級と結
其利が比類なき働の由を注進を同二十日上杉民部大丈憲政
勢と押へして留守の備へとなる小宮山丹後守昌友後利武部
信濃上杉方より松井田城後守と迫合敵三十三人討取由注進有
大将武田晴信小室小和して味方の諸士の勝利と聞て大に喜び
給ひ孫蔵の年七八歳の時より尋常なる者と思ひ流石
備前守が子なり夫へ及して扶頃弥治郎事茲年十九歳
彼官多く持なる犯小仰合ざる慷氣者と撰嫌



甲州の間三方端角豊後守小曽殿於佐手殿金丸若狭守小松大和
守より飛脚来りて云ける十九日午の刻御簾屋出火仕る不別当
山下伊勢守強働に即時小火と防ぎ留ぬ不思議なる白鷹二つ
御簾屋の上小昼夜三日の間あり甚後亡偏に明神の守護
終小不ら迫進ある甚日ら海野平小於て暑甚と油度手合せ
て刻限も又同刻なれば晴信感喜有て飯坊石清水と遥拝ふ
武運長久とぞ祈り終小此時運と両端小斗り信濃国の諸士就度
の長尾小属とるもなり又鼠宿の仁科上国の海野・浦野ぞ始め
て尾見曾田書御等ら甲州より降参し人質を出し
小室・岡山両城へ人質と入れ二十八日小晴信ら甲府へ
帰り入ら家

天文十六年長尾景虎が兄弾正左衛門晴景閑弱乱行ゆゑ
故
越後の諸侍数き乱をしつゝ景虎國家の危ことを計り
兄晴景と諸國中大半治ると聞る長尾平六が統黒田
和泉守金津伊豆守等堺砦を依く近隣と犯し百姓と
斬害する時間景虎今度海野平より越後を帰陣し
村松・安田・菅名の城と隙せ天文十七年迫越後の軍蹟是
虎が奇耳等を甲越軍紀二編を出に詳聞を入て合て
武田長尾小縣對陣之事

時や天下麻の如く乱れ英雄蜂の如く起り諸侍武名を重
して境を犯し中も東小北条早雲・今川義元上杉憲政織
田上総助西は大内義興・尼子・大友嶋津・龍造寺の諸大将武威と



裏して隣國と相呑し天下小自立せんと欲し中に武田大膳大夫
晴信は智勇兼備の名将あれいらんを區々して境を守ん
や諏訪頼茂村上義清と倒し信州を強くする小笠原長時木曽
義昌と対く信濃國を平均し次に上州の上杉相州の北条尾州の今
川等と乞ぼし勝を固め根を強くして上方を対て登り四國九州と
も切従んと思ひ乱れば天文十七年五月七日甲州を立て信濃國を
發向し小笠原大膳太夫長時と責潰せんと諏訪を攻て勝を分ら
高遠松本の押へして士大将馬場民部少輔日向大和守小宮山丹後
守穴山伊豆守小山田左兵衛尉長坂左工門尉と以て高遠・松本・
両城を手堅おり諏本を以て保科弾正忠正景が居る岩小押
寄て攻られば岩将岩城五郎左工門を尽て防ぐと

手繁く討たれぬ五郎左衛門防ぐ術尽て生捕られより山の
麓の砦に取籠る砦将沼大隅守武田が先勢と切崩せど二陣
の春日左衛門は横と討て出る砦士卒等多く討て迫る防戦叶
はずと砦に火と放ち主従三十余人煙の中に居ながらして切腹せ
り続く山岡喜藤太が砦と責破られぬ喜藤太も戦ひ負て討
死せり武田方より二日に三箇処の砦と責陥し勢ひに乗て高住
の城に取籠んと勢ひ押寄せる所に同国内山に在陣する飯富兵部少
輔より早馬あり長尾平三景虎に県へ出陣し近隣を起し
勢ひ最強大なり早く軍を向給へべしと告あれば景虎後勢
と防ぐべしと高住の戦ひと捨和田峠を越長窪筋より搦手
に内山に着陣す茲に長尾平三景虎より元父為景が孝養に

為就中と討死せざる能登加賀越前と手に入れ坂東八州海東七
州と幕下に服せり京師に上り足利殿義輝を縋し天下に
権柄と執る武名と四海に聞へ隣国と計り諸国に間者と入て国政
治乱と居ながら知る大将の剛倫と量り就中毅向の軍
議ある処に村上左兵衛尉義清武田晴信が為に国を逐れ越後
へ走つて幕下に降り信州葛尾城に拠る武の
義と守る一箇の村上と葛尾に籠城せしめ義清智謀足に
と早く勇猛人に超る大将家系に清和源氏伊豫守頼義
朝臣の舎弟陸奥守頼清が子白河院蔵人頭清経に仕る国司
任し頼清が四代の孫蔵人為国が子村上判官代基国が後裔にて
代々信州五郡の領主なれば幕下の将多く一端武田が威に怖れ

甲州より村上再び世に出るあらば恩と慕ひて再び
師に従ふべし是として先鋒とし義濃尾張三河遠江の諸將と屬
せしめんを是関國の基なり就中征代の儀と暫時止ふ度い石
孝ふ仰らるとも子孫の父祖に孝ある事國と大よし家名と
耀をふめらるて村上が頼らると諸し去年十月信州海野平より出
張し武田と手合せ勝し信國の後村松の城主野尻大膳安田の城
主篠塚宗左衛尉菅名の城主堅玉堂民部少輔と責討て城
と陥し國中に仕置あるべふ二編ふ世に出られ家事に合せ甲越軍紀信州ふ有村上
見負の諸將ようふふ使と送りて景虎に内通あらば景虎公
村上を力と添らし村上本國ふ帰城あらば武田方に大患あり速に晴信
當國ふ出馬し伊奈と責討て根と堅めし編ふ村上帰参に道

と絶後謀略と寛へひらば早く軍と當國に向給い武田方と逆
給ふべき由と云送る又村上が幕下の諸將ようも出陣と乞ふ事頻
なれば さらば信加ふ發向せんと宇佐美駿河守定行庄義作
守慶秀古志後河守秀景大熊備前守朝秀加地安藝守秀と
軍議あるていふも謀りて晴信と虚ふ和ふて討の是非思い
切らふ奮戦と雌し勝敗と一挙ふ決せんと宇佐美定行
武田が領へ嚴重なれば猶軍を交へ敵と結ふて虚と
討の外仕ひと軍策と評議し天文十七年又月下旬就後と雨殺
の付事らふくふて宇佐美駿河守定行鑓四郎兵衛景高大熊
備前守朝秀長尾遠江守藤景北条丹後守長國本庄義作守
慶秀新発田尾張守長敦本庄就所守繁長唐崎孫治郎吉俊

直江山城守兼續色部修理亮長實高梨源五郎頼春同源三郎貞頼千坂對馬守憲清鉄上野介安清黒川備前守彦盛須田右衛門尉吉江織部竹俣三河守春朝斎藤下野守朝綱大貫五郎兵衛尉時春桃井攢岐守直近松川大隅守元長島崎播守信貞朱の丸の指物小ちゝ鬼小嶋弥太郎荒川吉蔵等と始めとして驍勇の諸將を始へ信濃國戸石小出張あり。近隣と乱成ある。武田晴信ゟ就後詰出張と聞よう前の敵と捨て内山の陣と張筑ヶ川と隔て對を押就後の先を北条丹後守侯三河守足軽と出りと為り甲州勢ゟ陣へ鉄炮とかくるとゝ武田ゟ先を日向大和守昌時小幡上総守も足軽と出して是ゟ掛合せて早く引取れば就後方より手と替て先を対諸軍り端小柵山

甲州勢と罵つゝ戦ひと望ひとゝ武田方ゟ戦ひと始まり備と堅固小し使番の輩諸を迫て知と傳ゟ急と掛合と成利式部丞長坂左京勝沼入道市川梅印伯奇多淳正山本勘助ゟ命じて敵陣の動作と伺候せ虚と衝つく撃破んと伺へども互小智謀接戦の名將ゟ對陣あれいうでの遠あゝんや六月四日より十五日迄足軽の小迫合而已て徒ゟ月日送うれば景虎敵の機と伺と堪ふゝ我虚と対人謀略と覓べうう徒小睨合ゝ俄小陣掛ひし然と備と締と接戦虚小乗ゝ必定我後と咬間んと備強き兵士速ゟ取返し地利小信ゝ一戦と一挙小武田勢と対

530

甲越戦勢交戦乃圖

鎧四郎兵衛長尾遠江守新発田尾張守と右の備へ直江山城守
黒川備前守とたゝの備へ繰と援け道甲八陣の分配とは
の朝倉の陣と拂ひ軍と引揚られども晴信も又景虎が胸中と
察し十二人の使番の外に佐竹田弾正忠と添て先の晴信
変して使へと強ぐべらば元来敵と追の事あれ只陣と堅固
に守らべし敵の動作の如く弾正指揮申さんと嚴密に令し
なれば但雄の若者共寺巻と振り歯と切り見物而已にて一人も
追ざれば景虎も手便相違し云とても軍の勇明敏晴信武略
容易に敵あらばと景虎大に感心あり何仕出しる事もなく
と空く紙後の退ぞれば晴信も向山と陣拂ひ簡欲峠
松井田に出道と放火ありて甲州へぞ帰らるとぞ



武田晴信單騎塩尻峠出陣之事

茲に信濃國の在木曾の左馬頭義昌深志の中立原大膳太夫
長時其外先達て晴信に為に亡されて諏訪信濃守頼茂に属
下の伊奈郡の諸大将或は村上筑前の諸将等へ近年氏
田晴信に境を接らし無念止事に折節紙後の長尾景虎
村上方と合せ武田と干戈を爭ふ然幸あれ長尾と連横合従
日比の背憤を敵をべしと使を紙後に遣て
其等討て出武田に狭き対へ
対諸大将伊奈の諸将と催促し先信州へ
遠の城と責屠らんと其勢一万餘人打出れば高遠の城主板垣
故後守信形の嫡子弥二郎信里大に驚て甲州へ飛脚を

伊奈木曽ハ笠原一万騎人の軍勢ヲ以て居塚高崎と攻手んと既
ヨリ打出候ち敵を主戦味方を客戦あるべく一己の孤軍と以て
多勢に敵ハ撃合さん事中々思ひもよらぬ早く御出馬と所結
候ら馬と乗して急と告世時甲斐ハ諸士の旁と和議
ハん為独と興行あり〳〵観世太夫が道成寺と御見物あり晴信
公も自面打と舞せ給ふ折節高島城の告と聞假面と脱〳〵
呵〳〵と笑ひ給ひ伊奈木曽ハ笠原の者ハ近年我ヲ襲ひと
自立ち事ハ思ひ寄ぬと後楯ヲ頼ら属下の者共と塩尻道
迂空働ハさせ我出陣と撃掌く早く峠ヲ引揚させ伊奈木曽ハ
笠原の三将等我軍の後と襲く敵ヲ移と聞ヲ是虎川中島ヲ
打て出我と後ら対んと結構らるいそ其練暇ヲ隙〳〵ヒトく



敵の先陣ハ峠ヲ押上ぐる故ハ三将等が旗本の押付ざる先ヲ此方
より先と懸荷膳属下の奴原と追山朋一敵の圖と絶さ見と持
ら偽面とかぶつと投捨鎧取出よ馬引出せと舞臺ヲて物の具
大悲の弓小智恵の矢とえげ一度放てば千の矢先雨霰と降ら
く鬼神の上ヲ乱ヲ落れば盡く矢先ヲかゝり敵ヲ殺ら亡び
ふ〳〵と足拍子して沉ひ綱ヲ馬ヲ小ぶらと花
移ら進くも跡ヲ慕ひけや兵粮の用意せらる呼ら馬ヲ一鞭と
加へく乗出し給へば折節見物ヲあり武田左馬介信繁晴信
左馬介が唐名典厩ヲ鎧取く投掛晴信小勇ら〳〵と駈出給へあり今ハ諸侍又
是と聞く弛出る人〳〵小原美濃守小幡山城守小山田備中守穴山伊
豆守諸角豊後守小宮山丹後守日向大和守秋山伯耆守山本勘助

佐奈田彈正忠芦田下野守飯富兵部少輔三科肥前守曲淵正左衛門小山田平治左衛門荻原弥右衛門内藤修理正廣瀬郷左衛門等我一ゝと駈出でゞ雑兵等ゝ主ゝ續く車懸りに物具と擔げ兵粮と負ひ或ゝ鎗長刀と提げゝく跡と追事雲霞の如く大将晴信ゝ馬より鞭して急ぎ給ふ程小馬ゝ逸物主ゝ連者怪風の雪と捲がせく砂煙と跳ね立て馳給へば大将より付從ふ者ゆゝ春日源五郎小幡宗七郎金丸筑前守今井九兵衛三科肥前守等十三人ゆゝ過ぎ

ざりきり 池清